三島御殿址の古図（三島郷土館蔵）に御殿周囲の石垣が図示されていることも想起され，興味深い報告である。

遺物としては陶磁器がもっとも多く，他に金属品として貨幣，煙管，収納用具の金具，木製品として漆器，下駄，箸，櫛，建築資材等，その他として硯，墨書土器，木札等の出土が報ぜられている。

陶磁器については愛知県陶磁資料館学芸員井上喜久男氏の鑑定助言を求め，用途別と産地別（伊万里，唐津，美濃，中馬街道筋，常滑）に分類記述される。御殿跡であるから将軍等の使用に供された高級美術品から，在勤者の日常使用した大衆品まであった筈であるが，この点の記述を明確にして欲しかったし，陶磁器入手について農民・町人関係の遺跡でない特殊性に着目されているものの，具体的でないのが残念である。

文献による考察の章では，近世交通史上における御殿の意義と重要性を手際よく概説され，古図を示して津浪による移転以前の関所，宿場，御殿の配置を明らかにし，更に元禄15年の検地帳に見える御殿跡，御殿に使用される材木を伊那谷から出していること，家茂の上洛に当り先祖が御殿の払下げを受けたことを由緒として述べて，新居宿本陣が利用を願っていること等，興味深い史実が述べられている。

以上御殿に関するはじめての発掘成果にふさわしい貴重な報告といえよう。向坂氏が「私にとって御殿跡は馴じみが薄かったし，……正直いってあまり乗り気がしなかった」と告白されているように，御殿というものについての一般の理解と関心がいまだ薄い現状において，新居の御殿址が他に先きがけて発掘調査されたということは，渡辺和敏氏の熱心な提唱によるものというべく，渡辺氏に敬意を表したい。　（中島義一）

Guelke, L.: Historical Understanding in Geography: An Idealist Approach（地理学における歴史学的理解—観念主義の接近法）X＋109 p, 1982, Cambridge Univ. Press, £15

Guelke の観念主義（歴史）地理学の紹介はすでに幾つか書かれている（文献1•3•4•5•6）しかし彼の主張の基調，すなわち彼が折衷主義者であることの含意はあまり論ぜられていない。ここに紹介する Guelke の著作は，従来の主張をとりまとめたもので特に新しい論点を含むものではない。しかし，用語を改めるなどの工夫により論旨はさらに明解にまた単純になり，その結果，折衷主義者たる特徴とその可能性もしくは限界とが一層明らかになっていると思われる。そこで，まず本書の概要を述べたあと，主に Collingwood との対比で Guelke の観念主義の方法の特徴を考えてみたい。本書は，全体の要約である序論のほかに六つの章からなる。

第1章：歴史地理学における，歴史についての不適切な概念。

本章の中心問題は，単なる過去と歴史的過去との区別である。両者を同一視する見方を，Guelke は "temporal concept of history"〔歴史の時間的観念，すなわち歴史を単なる時間（の流れ）として観念すること〕と呼んで批判する。彼の考えでは，全ての過去の事象が歴史を構成する訳ではないこと（つまり歴史研究において事実の選択が必要なこと）は，実際上の問題ではなくて原理上の問題である。歴史は人間が自己の社会を自ら生成変化（発展）させてきた過程であり，自然の斉一的な時間的変化と区別される。そしてこの人間の創造性において能動的役割を果しているのが，行為の背後にある（或いは行為に表現された）思考である。より具体的に言えば，ある状況（またはその変化）のもとで人（々）がその状況ないしは変化をどう捉えどう対処しようとしたか，ということが歴史を作ってきたのである。歴史地理学は，歴史のなかでも特に大地の上に展開した人間の活動（たとえば聚落や土地利用など）に関心をもつが，原理的には歴史学の他の部門と違わない。

このような規準から見ると，これまでの歴史地理学の主方向を作ってきた Hartshorne・Sauer・Darby・Clark らの議論は，すべて歴史の時間的観念に拠っているので歴史地理学に堅固な基礎を与えることができない。またこれらの伝統的方向を打破しようとした J. Wright やその他の人々も，歴史の根本である「思考」に到達しなかった。

第2章：合理的理解

行為の歴史的意味は観念の関数である。それゆえ合理的理解は次の二つの部分からなる：一つは行為者の意図を確定すること，もう一つは行為者の理論を発見すること。両者のなかでも後者がより重要である。ここに理論とは，行為者が状況を捉え，かつそれに対処する際に依拠する準拠枠である。すなわち何を信じているかが問題であって何故そう信じて

いるかは問題ではない。したがって，理論を知るために行為者の心理（感情）に移入する必要はなく，さらに（合理的な）思考の部分でもそれが行為に関係していなければ考慮する必要はない。この，行為者の意図とそれが処理される理論とを知るという方法が，行為者の思考の再演である。

この方法は一人の行為者の単一の行為だけに適用可能なのではない。常民の集合的な行為（たとえば選挙）にも使える。さらに意志決定—行為の過程がそれほど意識的でない繰返しの行為でも，それが単なる習慣でない（すなわち一定の理論が存在している）限りはこの方法で理解できる（たとえば外科医が従前に行う消毒のような行為）。

行為者は自己の理論を踏まえて行為する。研究者が自身の理論を使う（つまり外部から行為者に押し付ける）のでは，行為者の理論を汲み取ることができない。歴史学において自然科学的方法を使うのは，人間が理論的行為者であることを考えない不当な仕方である。

行為者の理論というものは非経験的なものである。しかし非経験的な実体を措定することは科学理論でも行われている。したがって問題となるのは，かかる措定をすることの可否ではなくて，それの経験性である。科学理論と同様に合理的理解も検証に耐えあるいは修正・棄却されねばならない（そして現にそういうものである）。

第3章：合理的理解の概念に対する反論

この章では合理的理解の方法をめぐる幾つかの誤解と批判とに対して弁明を行う。

誤解の1：「合理性」を経済的合理性と解釈すること。Guelke の合理的行為とは思考する人間の，考慮にもとづく行為〔considered actions of thinking persons〕である。資本主義社会においてもこの合理性と経済的合理性とは同一でない。近代以前では両者に重なりさえ存在しないかもしれない。誤解の2・3：理解を共感と見なすこと，または行為者の全ての思考を再考するものと解釈すること。これが誤解であることはすでに明らかである。

一方，観念主義に対する批判として彼が取り上げている見解は，何らかの点で合理的理解だけでは不十分だとする考えである。すなわち次のような点が欠陥とされる：①社会的・自然的な環境を顧慮していない，②理論化を志向しない，ないしは理論を（顕示的に）使用しない，③無意識の動機付けを顧慮しない。Guelke の反駁の中心部分はこれらの批判すべてに対して共通である。すなわち，歴史学の目的は首尾一貫した叙述を行うことであり，そのために必要な理解は科学におけるような因果的説明を志向しているのではない，という主張である。つまり，科学的説明は事象の必要十分な条件を枚挙しようとするが歴史学的理解はそれを目指してはいないのである。

第4章：科学としての歴史地理学

科学の中心的特徴はその説明様式（Hempel モデル）にある。それゆえ科学としての歴史地理学を論ずるとすれば，歴史地理学の説明が理論・法則を含むか否かという点が問題となる。この場合，法則消費（適用）型と法則追求型という二つの型が区別される。前者では適用するにふさわしい理論（すなわち検証可能かつ有効な理論）が現に存在していない点が問題となる（唯物史観をふくめすべての歴史理論が検証不能であると Guelke は考える）。一方，自ら法則を定立しようとする立場も同様に，適当な法則に到達していない。しかもその際，困難を克服するためにモデルが利用されるが，その使い方がしばしば誤っている。すなわち，モデル自体に説明力があると考えたり，モデルの論理的構造が経験的妥当性を保証するかのように考えてモデルと現実との対応の欠如を無視する，など。結局，過去の蓄積を無視しまた「条件は同一」とするモデルの考え方は，歴史を否定するものである。

いずれにせよ，追求すべきものは行為の原因ではなくて意味，あるいは説明ではなくて理解，である。したがって適用しうる法則の有無にかかわらず，科学を志向する歴史地理学はすでにこの点で方向を誤っている。ただし，統計的・計量的手法自体は否定されない。それは史料の加工やまた史料批判に利用することができる。

第5章：観念主義歴史地理学：事例

本章では17C後半から18Cに亘る時期の Cape 植民地における（農業の）変遷の研究によって，観念主義の方法を例示する。

Cape 植民地は初め，船舶の補給基地として建設された。まもなく原住民からの牛の継続的購入に失敗するなど当初の計画が破綻したため，本国と同様の商業的小農による植民地とすることになった。しかしこの試みも失敗し，結局，大農経営が展開するに至った。そこで問題は，何故フロンティアが拡散

して大農方式が採用されたか，ということになる。Guelke は，同植民地をとりまく当時の条件下では，自給農業が比較的有利であったという事実を踏まえて，自由な土地やそれを背景とする商業的農業が魅力であったとする解釈や，個人の自由の保証が魅力であったとする解釈を不合理だとしている（ただし，彼自身の積極的な解答は示していない）。

第6章：結語

観念主義の方法は伝統的地理学を救済しようとするものであって，もう一つの「新しい」地理学を志向するものではない。問題なのは伝統的な論題（topics）ではなくて，それを扱う哲学である。観念主義は地域地理学にも堅固な基礎を与える。

以上が本書の概略である。

さて，Guelke の基本的立場が実証主義であることは Harrison & Livingstone がすでに指摘している（Guelke は否定しているが。文献15・13）。本書でもこの点は明白である。以下では彼らの指摘と重複するところもあるが，Collingwood との関係もふくめて六点についてこの点を確認したい（なお，ここで「実証主義」という名称は，本来の論理実証主義ばかりでなく，その後身たる論理経験主義なども含むものとして使用する）。

1. Guelke が実証主義と自己の立場とを区別しようとする最大の点は説明の問題である。しかし，Guelke が暗に前提しているように，Hempel モデルの採否がただちに実証主義の採否であるほど，両者は密接に関係しているのであろうか。議論の前提として科学の主たる機能を説明だとしても，説明の概念はいまだ十分に分析されていないと言う。その上 Hempel モデルにも原理的な難点が指摘されている（たとえば文献7，第4章）。したがって Hempel モデルを受け入れないとしても，実証主義者でないことにはならないと言える。

2. より積極的には，Guelke は理論の有意性の規準として Popper の反証主義をとる（もっとも彼は検証可能性も反証可能性も区別せずに言い換えているが）。そして彼は Collingwood の規準を全く顧慮していない。Collingwood は真理について次のように述べる：「真理は……いかなる単一の命題にも属さず，……諸命題をひっくるめた複合体にさえも属するものではなくて，問題と解答とからなる複合体に属する何ものかである」。「一定の複合体に含まれる問題と解答とは，……全体と全体の中でそれらの占める場所との双方に『帰属』せねばなりません」（文献2，p. 47）。これは必ずしも理論について述べたものではない。しかしそれは理論を構成する各命題に全体性を要求する。そこで，理論は全体として検討されねばならないという主張を導くことができる。このような，相対主義・革命主義に通ずるところのある Collingwood の立場を Guelke が採らなかったのは，彼が Popper 流の合理主義に立つからであろう。

3. これに関連しては，Guelke が人間の思考の発達について述べている点も注意される。彼は経験の理論負荷性を認め，さらに理論と一致しない事例が理論に対する不信を結果するとは限らないことを認めている（しかも，このような作用において科学理論が迷信などと異ならないことも）。それにもかかわらず彼は，「長期的には，純粋に経験的な吟味をくぐりぬけうる理論が他の理論を制して受容されると期待しうる」と述べる（本書 p. 28）。この点も Popper に依るのであろう。

4. 本書では Guelke は「説明」を完全に科学に譲ってしまい，歴史的方法によるものの「理解」と呼んでいる。かくして彼は Collingwood 的な，対象による科学と歴史との区別を棄て，（Rickert 的な）方法による科学の重層化を行ったことになる。このことの端的な表われは，Collingwood が社会科学を認めていないのに対し Guelke はそうでない，という対照である。なお，科学的説明と歴史学的説明とを対比して論じていた頃も，彼は地理学を含むように「科学」を拡げることを主張していた（たとえば文献 11, p. 386；9, p. 51）。

5. 「思考の再演」という中心概念においても Guelke と Collingwood とは相違している。すでに記したように，Guelke にとって再演とは思考の「発見」であり，それは反証可能な客観的な解釈に至る手段である。これに対し Collingwood の主張はそれほど単純ではない。彼にとって思考するという行為は同時にそれとして思考されるところのもの，すなわち再帰的な性格をもつものである：「それは，思考する精神に先立って既製の対象として設定されたり，そのような精神とは独立のものとして発見されたり，それそのものとして，そのような独立の状態で研究されたりすることはありえない」（文献8，p. 292）。

6. 上記の特徴は Collingwood の歴史学が主体

的・実践的であることと表裏する：「私たちが歴史を研究するのは，私たちに行動を求めている情況をさらにはっきり見抜くためなのです。ここからすれば，一切の問題を生みだす平面は究極には『現実』生活という平面であり，そうした問題の解決のために引き合いに出されるものが歴史なのです」(文献2 pp. 127～128)。このような立場は，科学が人間的情況の制御に失敗したことを第一次大戦において知り，「自然科学が教えてくれた自然界の諸状況の巧妙な処理法と同じものを人間的諸情況についても学びとらせてくれる人事の科学」（同上）を求め，それを歴史学に見出した Collingwood にとって当然のことであろう。これと対照的に，実証主義的な Guelke は知識の自律性を要求する：「歴史的知識は，直接の実践的価値が全くない純粋に知的な知識である。……歴史家は世界を理解しようとしているのであって変革しようとしているのではない。まさにそれ故に，過去についての知識に客観性を望むことができる」(本書 p. 34)

つぎに実証主義とは直接関係しないが，Guelke の枠組が静的なものであることが注意される（この点は，彼が歴史次元の探求の重要性を説き，ことに変化を重視しているだけに興味深い。なぜ静的であるかと言えば，彼の枠組で問題となるのは行為者の意図・理論・（客観的）状況の三者だけであり，しかもこの三者はいずれも独立かつ所与のものとして扱われるからである。意図と理論と（主観的）状況とは，常に均衡または調和の状態にあるように相互に関係している（もちろん，結果としてこの調和が崩れることはあるが，それは新たな所与として次の行為を生みだす可能性となるだけで，すでになされた行為の合理性＝調和志向に影響する訳ではない)。かって Guelke は，（自然）科学を志向する現在の地理学の説明を「機能的」であるとして，自身の「因果的」説明と対置させた（文献10・11など)。しかし以上のように考えると，Guelke の立場も何かしらシステム論的な機能論的なものに見えてくる。

またこの枠組では，行為者は一定の（主観的）状況のもとで一定の意図をどう表現（実現）するかという演算を行うにすぎず，全く受動的な存在と化している。人間の能動性・創造性を認めようとする Guelke にとっては，多少とも皮肉な帰結ではなかろうか。

ところで，Guelke が最も重視する行為者の理論は，決して個人的なものではなくて社会的なものである：「各個人は彼が生まれた社会の観念と伝統とを継承する。」「人間の思考の重要性はその累積的〔cummulative〕な性格による。知識は社会が発展するにつれて蓄積される。新しい観念は古いものを基礎として発展する」(本書 pp. 26～27)。Guelke が文化ないし歴史の文脈を重要視し，一般化を警戒するのはこのためである。(文献12, p. 59 参照)。

かくして，Guelke の枠組は単に行為者の内面を探るというテーマだけでなく，その内面（理論）を文化的・歴史的に位置づけるというテーマをも本質的な部分としていることがわかる。そして彼が科学志向の地理学からは，計量的技法を取り入れようとしていることを考えると，彼の立場は Johnston（たとえば文献16特に第5章）とほとんど同じであると言えよう。個人の内面・その個人を取り巻く環境・計量的技法の三ツ組というこの立場は，おそらく実証主義を基礎とする折衷主義者に共通する見解であろう。その限りで，Guelke の観念主義の方法は行動論的な方法よりも強力であるから（ただし後者が行為者から得られた顕示的な報告のみに依存している場合に)，地理学のなかで一定の役割を持つに違いない。しかしその時，この方法の機能は Guelke が主張するよりも遙かに小さなものになってしまうであろう（第5章の事例研究で，再思考の方法の果たす役割がきわめて小さいことは示唆的である)。

最後に。本書では総合に対する彼の考えが述べられていない。ただし，フランス歴史学のアナール派に関して「全体史というようなものは存在しない。そうではなくて無数の特殊史が存在する」と述べている（p. 13)。また，もっぱら分析的な「問答論理学」(文献2第5章参照）の方法を探求の指針としていることからも，彼は総合に否定的なようである（文献14には「地理学的研究において地域的文脈は決定的であるが，人文地理学の本質的課題は総合よりも分析と考える方がより正確である」〔p. 52〕とある)。いずれにせよ，少くとも伝統的地域地理学にとって総合の概念は（賛否を問わず）重要な問題である。それゆえ彼がこれについて論じていないのは不可解なことである。さらに，彼が総合を否定するのであれば，何らかの新たな枠組を提示せずに「堅固な基礎」を地域地理学に与えることはできないのではなかろうか。　（立岡裕士）

〔文献〕
1）櫛谷圭司「空間の“意味”の構造と構造主義の方法」人文地理36—3，1984
2）コリングウッド著，玉井治訳『思索への旅—自伝—』未来社，1981
3）千田稔訳編『地図のかなたに』地人書房，1981，11～12頁
4）高毛潤二郎・江幡正彦「行動地理学への二つのアプローチ」地理25—11，1980
5）矢野司郎「Leonard Guelke：地理学における歴史理論の理解—観念主義的研究方法—」人文地理36—3，1984
6）山野正彦「空間構造の人文主義的解読法—今日の人文地理学の視角—」人文地理31—1，1979
7）Brown, I.：*Perception, theory and cnmmitment*, Univ. of Chicago Press, 1977
8）Collingwood, R. D.：*Idea of history*, Oxford Univ. Press, 1961
9）Guelke, L.：'Problems of scientific explanation in geography', *Can. Geog.* XV—1, 1971, pp. 38～51
10) Guelke, L.：'Regional geography, *Prof. Geogr.*, XXIX—1, 1977, pp. 1～7
11) Guelke, L.：'The roll of laws in human geography', *Prog. Hum. Geogr.*, 1—3, 1977, pp. 376～386
12) Guelke, L.：'Geography and positivism' (Herbert, D. T. and Johnston, R. J. (ed.)：*Geography and urban environment*, vol. 1, John Wiely, 1978, p. 35～61)
13) Guelke, L.：'Idealist human geography ?,' *Area*, 11—,1979, pp. 80～81
14) Guelke, L.：'The idealist dispute in Anglo-American geography：a comment,' *Can. Geog.*, XXVI—1, 1982, pp. 51～57
15) Harrison, R. T. and Livingstone, D. N.：'There and back again—towards a critique of idealist human geography,' *Area*, 11—, 1979, pp. 75～79
16) Johnston, R. J.：*Philosophy and human geography*, Edward Arnold, 1983

菊地利夫著　日本歴史地理概説：古今書院，1984年，A5判，280頁

本書は，一人の著者によってまとめ上げられた日本の歴史地理に関する概説書としては，初めての刊行物である。もちろん，これまでも日本の歴史地理に関する概説書が無かった訳ではない。しかしそれらは，いずれも複数の執筆者によって分担執筆された編さん書で，必ずしも編者の意図や理念が貫徹されていたとはいえなかった。

これに対し本書は，1958年に『新田開発』（上・下巻，古今書院）を著わして歴史地理学者としての地位を確立し，1977年には『歴史地理学方法論』(大明堂）によって歴史地理学に対する考え方を世に問うた著者が，その理念を正面にかかげてまとめ上げた概説書であるという点に最大の特色がある。

本書の特徴として，著者自らが「はしがき」の中で列挙しているのは次の5点である。

① 従来の日本歴史地理が政治史の時代区分に従って叙述されてきたのに対し，本書では歴史地理学の本質にもとづいて時代区分を工夫し，過去の人々の環境知覚が異なる時期を画期とした。

② 従来の日本歴史地理の内容が日本国土の陸の歴史地理であったのに対し，本書では日本国土を陸からも海からも見て叙述し，日本を東アジアや世界の中において考察した。

③ 従来の日本歴史地理が過去の地理を客観的にみた事実を叙述したのに加え，本書では過去の人々の生活空間のつくり方を過去の人々の心理—歴史心理—を理解して過去の地理を解釈した。

④ 従来の日本歴史地理では全国にわたるその地域構造について叙述することが少なかったのに対し，本書ではそれぞれの歴史地理について空間構造と空間過程に重点をおいて叙述した。

⑤ 従来の日本歴史地理は過去の地理をさまざまな叙述理論で述べており，本書でもまた，とり上げた過去の地理に応じてさまざまな叙述理論を用いたが，歴史心理から当時の人々がいかに空間を組織したかを，その事実から理解し，解釈するという観点は一貫してつらぬいた。

これらの諸点は単に本書の特徴というにとどまらず，著者が本書を構想し，執筆するにあたって立脚した基本的な立場であり，引いては著者の歴史地理学観を簡潔に表現したものということもできよう。以下本稿では，本書の論述の中でこれらの立場がど